

## 事業概要書

事業名	子ども・女性活動グループつながりプロジェクト				
開始日	2016年12月1日	終了日	2017年5月31日	日数	182日
団体名	熊本子ども・女性支援ネット (KCW)				
(カウンターパート)	なないろネットワーク熊本、逢桜の里、臨時オケタニ式母乳相談室、特定非営利活動法人くまもと子どもの人権テーブル、Wish happiness、こどもの給食を考える会熊本、NPO 法人山都のやまんまの会、ひかわスポーツクラブ、よかあんばい JAPAN、熊本フラワーエッセンスメンタルサポートセンター、一般社団法人あいむあーす等				
担当者名	園田敬子	スタッフ人数	5人		

事業費総額 (税込)	5,500,000 円
CF 事業枠	4,500,000 円
その他資金	1,000,000 円

事業目的	<p>熊本地震の被災経験を乗り越え、持続可能な未来につながる熊本の地域づくりのために、ネットワーク体制の整備と連携強化をはかる活動を促進する。また、災害時に母子を守るための仕組みづくりとして、「社会的保育士派遣プロジェクト」をモデル的に実施し、意見を取りまとめ、提言する。</p>
事業全体の概要	<p>●熊本子ども・女性支援ネットとは</p> <p>2016年熊本地震を経験し、救援から復興にかけて、子どもと女性のケアが見過ごされることがないように、子どもと女性の声なき声を聴き、権利を保障し、子どもと女性が希望を持ち、自らの日常の安心を取り戻すことができるようサポートしていくため、2016年4月20日に発足した。</p> <p>●取り組むべき課題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「子ども・女性」の支援分野で活動するグループのネットワーク体制の整備と強化を図る。</li> <li>・ 熊本地震を経験し、被災を超えて、持続可能な熊本の未来づくりのため、活動した団体や個人の活動の情報共有と今後の連携・協働に向けた場を設定する。</li> <li>・ 今後県内外とのネットワークづくりや活動の充実に向けて、過去の事例を学び、意見交換や調査ヒアリングを目的とした視察の機会を設ける。</li> <li>・ 熊本地震における子どもたちの心身のダメージは大きく、その中で保育園は不安定な子どもたちや保護者の抱える不安や悩みを受け止め、寄り添いながら日常に戻していくための大切な役割を担っている。しかしながら、その現場にいる保育士たちもまた、発災直後から支援者として不眠不休で動いており、心身の疲労が</li> </ul>

ピークに達している状況が見られる。また、平常時においても離職率の高い傾向があり人材が不足しがちな保育の現状がある中（2013年の厚生労働省の調査によると、2017年度末には保育士が約7.4万人不足することが見込まれている）、このような非常事態において、厳しい状況に堪えきれず実際に保育士（特に経験の少ない保育士）の離職者も出始めており、保育の現場を支える緊急支援としての対策が急がれる。

- ・熊本地震発生後、様々な緊急時の対応を行ってきた「保育園」や「保育士」の社会的役割の大きさを再認識することとなった一方で、社会的認知度・待遇の低さが顕在化した。行政・教育・医療機関には、発災直後より被災地外から専門家が派遣される中、保育所にそのような支援の仕組みはないのが現状である。日常を取り戻すことが最優先される保育の現場では、保育の経験のない（または少ない）ボランティアでは、子どもたちや保育の混乱を招いてしまうこともあり、子どもたちや保育士が安心して支援を受けられるような仕組みづくりが必要である。

#### ●パートナー協働プログラム対象事業

①第1期において、熊本県内の活動団体調査を実施し、基礎的データを把握した。また、今回の「熊本地震」を受けて、熊本県内の「子ども・女性」支援分野のグループのネットワークづくりを進めていく中で、特徴的な支援活動を実施した団体や人にフォーカスして個別ヒアリング調査等も実施した。震災発生直後から、この一連のプロセスを通して獲得した情報や課題の共有、そして、今後更に持続可能な熊本の未来をつくるための連携強化を目指したシンポジウムを開催する。また、県内での今後の活動の充実に向けた県外とのネットワークづくりや過去の事例から学びを得、調査ヒアリングするための視察研修を実施する。

#### ②熊本地震から学び、提言する「社会的保育士派遣プロジェクト」

本プロジェクトでは、専門家（日本福祉大学 塩崎美穂准教授）の助言・コーディネートを得ながら、被災地近隣の市町村や他県から「社会的保育実践者」を派遣し、現場の保育士（特に新人保育士）の支援を行う。この仕組みを構築することを通して、保育現場の混乱を最小限に抑え、不安定な子どもたちや家庭の回復をサポートし、また、不足しがちな保育人材の震災による離職を防ぐ。

塩崎氏は、2003年より東京都内の6つの大学講師、2010年より熊本大学教育学部非常勤講師、2011年から2014年にかけては尚絅大学短期大学部幼児教育学科准教授を務めた経験を持つ。数々の保育に関する執筆の中で県内保育園を題材とするなど、熊本県内の保育現場を直接見て現状に精通しておられ、今回の派遣プログラムのコーディネートにおいて、受入園と、その園に適した「社会的保育実践者」のマッチングに重要な役割を果たしている。また、塩崎先生の保育学生や新人保育者の一人ひとりに対しての愛情あふれる指導は定評があり、保育士の社会的地位の向上のために様々な活動を行っている。熊本地震直後には愛知県の子ども・女性に関わるメンバーと「熊

本こども・女性支援ネットあいち」の発起人となった。

今回の派遣において、重要な意味をもつ「社会的保育実践者」の定義として、塩崎氏は以下の4つを挙げている。

◆ 保育の果たす社会的役割をわかっている【理念・意志】 - 被災地や貧困地域など、家族だけでは子どもが安心して発達する権利を守れないような地域の保育が、保育園・幼稚園で行われることの社会的使命を理解し、家族の生活を含めて子どもの育ちを支援できる。したがって、社会的養護、発達支援の必要な子どもへの保育の経験をもつ保育者がのぞましい。

◆ 身体一つで保育ができる【知識・技術】 - 「何もないところ」「いつもとちがう場」でも、呼ばれてすぐに保育ができる専門性をもった人。(子どもとその親を支える専門職としての仕事ができる) ⇒ 素ばなし、てあそび、うた、ふれあいあそび、手元にある資源であそぶ・・・というような、保育の知識と技術が豊富であること。

◆ すでにある価値観(生活や保育)を批判しない【包容力・ユーモア・デザイン力】 - 保育園や幼稚園に派遣保育者として入る場合、受け入れ園で実践されている保育を決して批判せず、さりげなく、でしゃばらず、でも確実に、安心・安全な居心地の良い子どもの空間(場合によっては親子の空間)をつくることができる。⇒ 手元にある資源だけでも、その場を改善する「暮らしのデザイン」力がある(保育は生きることそのものであるため)。

◆ 親子および子どもと保育者の関係への支援ができる【関係性への専門的理解】 - 親(あるいは受け入れ園の保育者)が不安になり、イライラして子どもに適切な配慮ができないような場合には、子どもが親(あるいは保育者)からの安定を求めて、ぐずぐずすることが多いが、そうした状況に対して目立ちすぎない形で、それぞれの人の不安を取り除くやさしい語りかけや見守り、新しい場面への転換ができる。⇒ 子どもと親、子どもと保育者の関係が良好な状態に向かうよう支援できる。(自分が前面に出て主役になったりしない。あくまでもエンパワーメントが仕事だとわかっている。)

今回、熊本でモデル的な取り組みを実施し、今後、震災などの非常時に、子どもと女性を守るためにはどのようなしくみや連携が必要であるか検討する。モデル派遣終了後には、派遣保育士の方々の反省会を実施し、その後、成果報告会を熊本にて開催し、意見を取り纏め、提言する。

#### ●期待される効果

- ・ 「熊本地震」を経験し、これから長い時間を要することが予想される復興＝持続可能な未来に向けた熊本地域づくりにおいて、これまで横の繋がりが出来ていなかった「子ども・女性」分野で活動している団体のネットワーク体制強化が図られることで、情報や課題の共有、連携・協働体制が整い、多様な相乗効果が生まれることが期待される。また、その中から、復興を支える次世代リーダーの発掘

	<p>や人材育成が見込まれる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 過去の事例（東北震災後の被災地訪問と団体との意見交換、ヒアリング等）を学び、その知見を今後の熊本での活動に活かすことができる。</li> <li>・ 被災により、日常もさることながら、益々厳しい現状にある保育士（特に新人保育士の）の心身の負担を低減し、離職を防ぐことができる。</li> <li>・ 保育士の安定により、子どもたちや保護者の被災からの回復をサポートする。</li> <li>・ モデル的な取り組みを実践し、提言していくことで、他地域の災害時にも活用出来る仕組みづくりを構築していく（支援-受援体制の確立）。</li> <li>・ 保育士の社会的役割の重要性を発信し、社会的地位向上に向けて支援することで、日常の保育の「質」を高めていく。このことは、緊急時において、“いのち”を守ることにつながり、「防災」の大きな役割を担うものである。</li> </ul>
事業内容(事業種別（コンポーネント）ごと)	裨益者（誰が、何人）
①被災を超えて、持続可能な未来をつくるため、熊本県内の「子ども・女性」支援分野のグループとのネットワーク体制整備と連携強化を目指したシンポジウムを開催する。	熊本県内で活動する団体や被災者等
②熊本地震の経験から、子どものそばに安定した大人がいることが重要であり、保育士はその意味で重要な役割を担っている。今後、他地域での災害時に役立つ支援と受園体制づくりのモデル事業として「社会的保育士派遣プロジェクト」を実施し、派遣事業終了後には保育士との反省会を開催する。そして、成果報告会を実施し、意見を取りまとめ、提言する。	熊本県内外の保育士や熊本県内で活動する団体・被災者等